



年間第 29 主日 (ルカ 18:1-8)

気を落とさずに絶えず祈るなら結果になる

東京に行ってきました。教区広報担当者の会議でした。新潟の菊地司教さまが基調講演をしてくださいました。福音宣教のために、現代社会で人と人をつなぐ道具になっているものを、特性をよく見極めながらも、積極的に使い、福音宣教に役立てるように呼び掛けてくださいました。現代社会で人と人をつなぐ道具として特に目立っているものは、ソーシャルネットワークキングサービスという枠に含まれるもので、たとえばフェイスブックや mixi や、ツイッターなどを指しています。これらの道具はもちろん危うさを含んでいます。こうしたネット上の道具で出会った人同士がトラブルになるケースもありますので、賢明な使い方が求められますが、恐れているばかりではこれだけ社会に浸透している場をみすみす逃すこととなります。経験のある人などに教えてもらったりすると、福音的な価値観を広める場にしていけることもできます。さて福音は、「気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教える」というねらいで、「やもめと裁判官」のたとえが取り上げられています。やもめは、相手を裁いて、守ってもらうために、裁判官のもとにひんぱんに通っています。この裁判官は、「神を恐れず人を人とも思わない裁判官」(18・2)として取り上げていますから、強い者にこびへつらい、弱いものを踏みつけるような態度を取っていたのでしょう。時代劇で言えば、水戸黄門に成敗される悪代官だったのだと思います。しかし、悪代官であっても自分の主張を取り上げてもらう人が他にいないやもめにとっては、どうしてもこの裁判官の心に訴えかけて、自分を守ってもらう必要がありました。やもめにできるたった1つの手段は、「うるさくてかなわない」「さんざんな目に遭わす」そう思わせるほどひっきりなしにやって来て求め続けたのでした。わたしたちも、絶対にあきらめないで願い続ける、期待し続けるという体験を、わたしたちと神との間で持ちたいものです。そのために、自分に身近なところで、あきらめないでよかったなあ、この日をずっと待っていてよかったなあという体験を積むと、それが役に立つと思います。先週の東京出張で、わたしは広島教区から来ていた2人の広報担当者を知り合いになって帰って来ました。中田神父は広島カープのファンなので、今年はかなり期待して野球を見ているという話を別の人と話していたのです。するとその話で広島の広報担当者のかたが大変興味を持ってくれまして、すっかり意気投合して話に花が咲きました。話は脱線してしまいましたが、わたしの応援しているチームは16年ぶりにAクラスに入り、ようやくクライマックスシリーズを勝ち上がってセリーグの優勝チームに挑戦できたのです。16年もこの日を待っていました。夏の蟬でさえ、7年地下に潜っていれば1週間地上で大声で鳴くことができます。わたしは16年間、応援しているチームの話や話を地下に潜って話していたのですが、今年ようやく話すことができたのです。

けれどもわたしはその間決してあきらめたりはしませんでした。わたしの中には、応援し続ける理由がいくつもあって、あきらめる理由一つも無いからです。わたしの名前は中田輝次（なかだこうじ）ですが、下の名前の「こうじ」というのは往年の名選手「山本浩二」から取ったと聞かされています。そして、父はわたしを膝に抱いて、「こうじ頑張れ、こうじ頑張れ」と言いながら野球観戦をしていました。

ほかにもわたしが今なお日本シリーズに20年近く出たことのないチームを応援する理由はあるのですが、そうしたことをさんざん話していたら、今年出会った広島広報担当者のかたから、「広島教区の司教さまに『長崎には熱烈カープファンの司祭がいます』とお伝えしておきます。ぜひおいでください」とまで言われてしまいました。わたしも心から長崎教区を愛しておりますが、どうしても広島に来てほしいと言われたら、広島だったら考えてもいいなあと思っています。

つい脱線してしまいましたが、わたしにとっては応援している球団が「あきらめないでよかった、この日をずっと待っていてよかった」という体験になっています。16年この日を待つことができるのですから、イエスが気を落とさずに絶えず祈らなければならないと励まし続けることをもっと身近に考える材料を、わたしたちは持つ必要があると思います。わたしたちには、それぞれの体験の中で、「気を落とさずに、願いが叶うまで待ち続ける」具体的な例がきっとあると思います。その、自分では経験していないような貴重な体験を、もっと周りの人を力づけるために役立てて欲しいです。

気を落とし、もう神に願うのはやめよう、もう神に祈ってもしかたがないと感じている人がいるかも知れません。そうした人に、もう少し祈る努力を続ける気持ちに向かわせることができるなら、わたしたちの個人的な体験は自分だけのもので終わらずに、人に役立つことになります。イエスは最後に、「しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」（18・8）と言っています。一人でも多く、生活の中で祈り続ける人、信仰が生活の土台になっている人がイエスの再臨の日まで立っていることを願いたいと思います。昼も夜も主に叫び続ける力を、今日のミサの中で願いましょう。